
仮面ライダー龍騎 ~ EPISODE Kanon Trillogy ~

龍騎鯖威武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー 龍騎 ↳ EPISODE Kannon Trill
ogy

【Nコード】

N5990W

【作者名】

龍騎 鯖威武

【あらすじ】

城戸真司から「仮面ライダー 龍騎」を継ぎ、新たな「仮面ライダー 龍騎」に変身する少年。その少年を含め、彼の身の回りの者たちが主人公となる物語。彼等は一体、何を見出すのか。あなた達に見届けてほしい。

日常 「2人の剣士」 (前書き)

お待たせしました！…最近テストで、時間が無かったんですよ(汗)
「龍騎トリロジー」第1弾は、祐一と舞にスポットを当てていきま
す！

これは、ディケイド編終了直後です。NoMen編の少し前ですの
で、ご了承を。
それではどうぞ…。

日常 「2人の剣士」

ザァン！

「…逃がした」

舞は今日も、魔物退治を続けていた。

「あまり無茶するなよ？ 足だって全快じゃないのに」

「そうですね。それに夜は女の子には危険なんですよ」

「佐祐理さん、そこですか…」

そう言ってくるのは祐一。隣には佐祐理も居る。共に、舞のサポートを行っているのだ。

「でも、こうしないと何も変化は無い…。待っていても…」

舞が呟く。彼女の足の痣の謎は、未だに解明されない。しかし、ここで立ち止まっているわけにもいかないのだ。立ち止まっていたら、きっと後悔するかもしれないから…。

その帰り道…。

「…舞。そういえば、動物園に行きたいって言ってたよな？」

「…どうして？」

「明日、行かないか？」

祐一の突然の申し出に首を傾げる舞。

「おまえ最近、切羽詰りすぎだ。肩の荷を降ろして、穏やかに過ごすことも悪くないだろ？」

「祐一さん、デートですか？」

くすりと笑って、質問する佐祐理。祐一は苦笑して返す。

「はやし立てないでくださいよ佐祐理さん。舞はそんなつもり無いですよ」

「それでも…良い…」

舞は俯いて答える。

「祐一とデートするのは、多分きらいじゃないから…」

あまり表情の変化が無い舞だが、今は恥ずかしがっていることがよく分かる。顔がほのかに赤い。

祐一はそれを見て、優しく声をかける。

「決まりだな。明日の12時ちょうど。いいか？」

「はちみつくまさん」

次の日の朝。

百花屋で祐一は、ある3人を呼び出した。

「…という訳だ。言ったのは良いが、何をすればいいか、分からなくてな…」

「祐一がデート？」

「相沢がなあ…」

「あまり、そんなことを悩む人には見えなかったけど…」

祐一が相談を持ちかけたのは、潤、香里、名雪の3人。

クラスも同じで、行動が一緒になることが多いこの4人は、クラス内でも有数の仲良し組みである。

「おまえら、何気に酷いこと言っていないか？」

ジト目で文句を言う祐一。今まで友達をイジってきたしっぺ返しなのだろうか。

「わたし、デートのやり方なんて…く〜」

「寝るな！…たく、こいつは考え事をする癖もあるのか」
名雪自身、必死に考えを絞ってはいるのだが、どうしても睡魔には

勝てないらしい。

香里に目を向けるが、彼女も首を左右に振る。

「残念だけど、わたしもそういう経験は皆無よ。何も教えられないわ」

「じゃあ、おれと行かないか？」

潤が、席を立って誘う。

「出直してきなさい」

「そんなあ〜…」

「こいつらに聞いたのは間違いだつたな」
祐一は3人を放って、店を出た。

「うーん…」

「見つからないね…」

辺りを見回しているのは、竜也とあゆ。

一応、本編の主人公とヒロインなのだが、今回は探し物をしている祐一達の友人という形に留めておこう。

今回の主役は祐一と舞なのだから。

「よ、竜也とうぐう」

「あ、祐一くん！…って、ボクうぐうじゃないもん！」

「祐一、あゆをイジめるのは、いい加減にやめてよ…」
早速あゆイジリ。さっきのことに懲りていないようだ。

「悪い悪い。ところで、聞きたいことがあるんだが、良いか？」

「なに？」

「おまえら、デートしたことあるか？」

「「ええっ!?!」」

声を八もらせて驚く2人。

「そ、そんなことないし、それにボクと竜也くんは、そんな関係じゃないよ…!?!」

「そうそう、昔からの古い友達！」

慌てふためいて否定する2人。なんとも初々しいというか…。

「…なら質問を変える」

今までの流れを説明し終えた祐一。

「なるほど…」

「舞さんと祐一くんが…」

先ほどとは打って変わって、首を傾げて唸っている竜也とあゆ。

「なにか、いいプランがあったら知恵を貸してくれ」

「…案外、何も無いほうがいいと思うな」

何気ない様子で答える竜也。

「おれ、そういう経験は全く無いけど、色々考えるほうがなんか違う気がする。自然体で接することが大切なんじゃないのかな？」

「…確かに」

祐一は竜也の言葉を聞いて、考えが変わり始めた。

舞を喜ばせることばかりに気が行ってしまつて、基本的なことを忘れていた。

「貴重な意見をありがとよ」

そう言つて、手を振りながらその場を後にする祐一。

ふと思ひ出したかのように振り返り、こう告げた。

「そういえばおまえら、古い友達つて言ってるけどな、どう見たつてカップルだぞ。ちよつと竜也がロリコンみたいだがな」

「えっ!?!」「うぐっ!?!」つて、ロリコンつてどういう意味?」

2人は真つ赤。あゆは真つ赤になつてはいたが、そのあと聞きなれない言葉の意味を竜也に聞く。

「確か…年下の女の子好きのだけ…?」「うぐうっ!ボクは竜也くんと同い年だよっ!」

もう見えなくなつた祐一に向かって叫ぶあゆ。

待ち合わせの場所である動物園の入り口の前には、一足早く舞が辿り着いていた。

「祐一、遅い」

「まだ時間まで10分あるだろうが」

舞は20分早く来ていた。実はここに来る前に、佐祐理から一つ聞いていたのだ。

「舞、良いですか?女の子が待ち合わせに早く来ると、男の子は申し訳ない気持ちになるから、お願いを聞いてくれやすくなるんですよ〜」

この言葉を聞いて、試しにやってみることにしたのだ。

「女の子を待たせるのは、最低」

「はいはい。じゃあ、これで許してくれるか？」

祐一はやれやれといった感じで、舞の手を握る。

「…っ！」「さ、行こうぜ？」

舞の応答を聞かず、動物園内に入場した。

…で。

「そればかり見てるんだな」

祐一の目線の先には、ウサギをじっと見つめる舞。

入園してから結構時間がたったのだが、ずっとこれだけを見ている。

「お母さんの思い出だから…」

「そっか…」

舞の母親は浅倉によって殺害された。

それ以前にも、虚弱体質で命が危機に瀕したことは何度もあった。

「舞、動物園に行きましようか」

「でもおかあさん、かぜが治らないんでしょ？」

「いいのよ…わたしは…けほっ！けほっ！」

「おかあさん！」

このころより少し前、身体が治ったら動物園に行く約束をしていた。しかし、一向に良くならなかつた。

あることを機に全快したのだが…それはまた別の機会に話すとしよう。

ちょうど10年ほど前の冬

「ねえ、おかあさん！」

「舞？」

舞が手を引いて入院している病院の庭に出ると

「ほら、動物園だよ！」

舞が作った雪ウサギがたくさん並べてあった。

「本当…」

こうして約束は守られたのだが…。

結局、本当の約束が果たされることは無かった。

「祐一は…居なくならない？」

「舞？」

振り向いて不安そうに尋ねる舞。

「お母さんみたいに、居なくならない？」
もう一度聞く。

祐一は、舞の目の前に歩いてきて、彼女の頭を優しく撫でる。

「安心しろ。竜也や斉藤ほどじゃないが、おれは意外と強いぞ？少
なくとも、おまえを守ることくらいは出来ると思う」

「祐一…」

舞は、祐一の胸に身体を預ける。

「ちよつと…だけ」

「ああ…」

彼の存在を、強く感じながら、少しだけ目を閉じた。

「よし、デートはこれからだ。もっと他のやつも見ようぜ？」

祐一の言葉に、少しだけ頷いた舞は、祐一の手をもう一度握る。

「甘えん坊だな、舞は」

「祐一だから…」

これから降りかかる戦いの間の小さな安らぎのときである…。

彼らは、この安らぎを果てるまで続けられるようになるため、戦い続けるのだ…。

仮面ライダーとして…

そして人間として…。

日常 「2人の剣士」 (後書き)

如何でしたか？

あれ、あんまりほのぼのしていないような… (汗)

ていうか、原作の祐一は、もっとふざけてノリの良いキャラだったんですが、なぜか中途半端なクールキャラに…。ナイトに変身させてる影響かな… (笑)

さて次回は、潤と香里の2人がメインですよ！
ではまた…。

キャスト

相沢祐一 〓 仮面ライダーナイト

川澄舞 〓 仮面ライダーファム

舞の母親

倉田佐祐理

北川潤 〓 仮面ライダーライア

美坂香里

水瀬名雪

月宮あゆ

龍崎竜也 〓 仮面ライダー龍騎

日常 「無力ではない今」(前書き)

どうも、龍騎鯖威武です！

今回は、潤と香里に焦点をあてていきたいと考えています！

一番カップルっぽい2人ですが、またまたデートのシーンは、ほぼ無しです…(汗)

ちなみにこの話は「2人の剣士」で祐一が、潤、香里、名雪を置いて、百花屋から出て行った直後の話ですので、「2人の剣士」を先に読むことをお勧めいたします。

あと、特別ゲストも登場しますよ！誰かは…お楽しみに！
それではどうぞ…

日常 「無力ではない今」

「おまえらに相談したことが間違いだった」
そう言つて、百花屋から出て行つた祐一。

「あ…祐一、居なくなつちやつた…」
目をこすりながら目覚めた名雪がポツリと呟く。

先ほど、舞とのデートについて知恵を貸してくれと頼んできた祐一。
結局力になつてくれない3人をおいて出て行つてしまった。

「まあ、あいつのことだ。何とかやつてるだろ。それよりも香里さ
あ〜ん、たのみますよ〜」

今回の主役である潤は、香里に両手を合わせて拝むように頼み込んでいる。

「だから、出直してきなさいって言つてるでしょ!」

「んなこといつても〜」

「あ〜もう!やめなさい!」

香里はシツシツといった感じで、手を払いながら潤を追い払つと、そこへ…

「あれ、おねえちゃんに水瀬さん、それに北川さんも!」

現れたのは栞。ふと百花屋に立ち寄つたようだ。

「こんにちわ〜栞ちゃん」

「よ、栞ちゃん!いや、おれの将来の妹よ!」

「いい加減にしなさい!」

ドゴツ!

「ゴほっ!?!」

潤の言葉に痺れを切らして、肘打ちを決める香里。相変わらず鋭く、強力な一撃だ。

その攻撃を受けた潤は、テーブルの下へ撃沈。

言つておくが、彼は立派な仮面ライダーライアである。

「あゝあ。北川さん、大丈夫ですか？」

よいしょ、よいしょと言いながら、潤を起こす栞。

「やさしいなあ、栞ちゃん。お姉ちゃんに見習わせてやれよ」

「何言ってるんですか。おねえちゃん、すごく優しいですよ？」

「あっ！？栞、やめて！」

栞の言葉に、香里はあたふたと慌てながら、彼女の口をふさごうとする。

が、物凄く早口で喋りだす栞。

「だっておねえちゃん、北川さんが怪我したとき、心配ばかりしてるんですよ。「北川君に何かあったら、わたしは〜！」って」

「いやああああ！やめてえええええ！」

耳をふさいで、店内に響き渡るかのような絶叫で叫ぶ香里。

「えへへ〜。本当のことですよ、北川さん！」

そう言った後は、あらかじめ頼んだアイスを美味しそうに食べていた。

「香里、おまえ……」

「ええ、そうよ！あなたが怪我ばかりするから、心配なの！文句ある！？」

開き直ったのか、先程まで隠そうとしていた内容を、大声で叫ぶ。しかし、潤は……

「そうだったのかよ……」

いつもなら、悪ノリして香里に色々言うのだが、今回は黙って俯いた。

「なによ、そんなにバカバカしい？」

香里の質問に首を左右に振って、こう答えた

「…すまないな。そんなに気に掛けてるなんて思わなかった」

「え……？」

「おれは、おまえを守りたかったのに……。心配なんてさせてるんじゃない、ライダー失格だな」

潤は、本気で落ち込んでしまったようだ。

栞もこんな事態になるとは予測していなかった。

「えう〜…こんなつもりじゃ無かったのに…」

居辛さを強く感じ、アイス代をその場に置いて、栞はその場から去った。

残った二人に、新しく友達が現れる。

「なんだ、ずいぶん静かなピンクだな」「あ…！」

ミツルと真琴である。

「…よう、斉藤」

明らかに、テンションが低い。

「美坂、何があった？」

ミツルに香里が一通り説明する。

「ほう、ようやく自覚したのか。だが、自覚できたってことは、それを改める気持ちがあるんだろう？」

その言葉にも、まったく反応を示さない。

それを見ていた香里は…

「北川君、行きましょー！」

「お、おい香里！？」

潤を連れて、百花屋を出て行ってしまった。

「よくわからん…」「あう…」

首をかしげているミツルに、真琴が袖を引っ張ってあるものを指差す。

それは…

「ちっ…仕方ない、サービスしてやる。おい水瀬、帰ってから寝ろ！そうじゃなければ、ここの支払い、3人分払わせるぞ！？」

「うにゅ〜…」

「おい、何処まで連れて行くつもりだよ！？」

「今からデートよー！」

「は？」

香里の言葉で目が点になる潤。

「デートしたかったんでしょ？」

「お、おお……」

「あなたを元気付けるためと、いつも頑張ってるご褒美よ。感謝しなさい」

それだけ言うと、顔を背けてしまう。それは、恥ずかしさゆえに顔が赤くなっていることを気付かれないためだ。

「……よっしゃああああ！まじかよ香里！なら、とっとと行こうぜ！」
「きゃっ！」

今までの暗さは何処へやら、急に元氣ハツラツになって、香里の手を引いていく潤。

祐一と別れたばかりの竜也とあゆに、新たな来客。

「竜也さ〜ん！」

「へ……？」

ドンツッ！

「おわあっ!?!」

背後から朶に抱きつかれ、バランスを崩して倒れてしまった。

「し、朶ちゃん!?!」

隣でその様子を見ていたあゆは、黙っていない。

すぐに引き剥がそうとする。

「竜也くんから離れてよ〜！」

「はっ……すみません」

すぐに離れる朶。

「どうしたの？」

「それが……」

朶は、竜也とあゆに一部始終を説明する。

「……と、言うわけなんです」

竜也が難しそうに首をかしげている

「う〜ん……」

「安心しろ。お前の判断は間違っていない」

不意に声を掛けられる。

その方向を見ると、少し離れた場所に、オレンジの上着を着た若い占い師が居た。

占い師だと分かったのは、それを思わせるような机に商売道具等を並べて座っているからだ。

机の上にある紙の上で、糸に通したコインを揺らす。

「お前、姉の恋を実らせたいんだろ？」

「え、ええ……」

「そのために取った行動が、悪影響を及ぼしてるんじゃないのかと考えているんだな？」

見事に当てる占い師。

先程の話を聞いていたのかとも考えたが、よく考えたら、それは距離的にありえない。

3人の話し声が聞こえるには、どんなに耳が良くても、今の距離の半分くらいは無いといけないはずだ。

「今、2人はデートに行っている。お前の姉が起こした行動だ。相手を気遣ってな。お前の行動が、きっかけを起こした」

「本当ですか!？」

菜の喜びと驚きに満ちた言葉に軽く笑い、こう言った。

「俺の占いは…当たる」

「わたし、見てきます!」

そう言っただけで走り去った菜。

「ああ…行っちゃった」

菜の姿が消えた後、竜也とあゆが占い師の居た方を向くと…。

占い師は最初からその場にいなかったように、消えていた。

「あ、見つけた!」

栞はデートに行きそうな場所を手当たり次第に探していると、遂に2人を見つけた。

「…それにしても遊園地なんて急すぎるし、子供っぽくないかしら?」

「んなわけあるかよ! 香里といれば、何処だって楽しいぜ!」

2人は、街から少しはなれた遊園地に辿り着いた。

「もう…」

口では呆れたようだが、心は違う。自分をここまで想ってくれる潤に何よりも嬉しい気持ちになった。

「なあ、香里。さつさと…」

潤が振り向いたとき…。

香里の唇が、潤の頬に触れた。

「早く行くわよ?」

そう言っつて、足早に歩いていく香里。

「…!?!?か、かかか香里い!?!?」

さすがの潤も真っ赤。

しかし、彼の性なのか…。

「アンコール! もう一回お願いします、香里さああん!」

彼女を追いかけていった。

2人をほほえましく見つめる栞を含めて、それを見ていた者がいた。先ほどの占い師だ。

誰に言うことも無く、潤の未来を占っていた。

「北川潤…。これから凄まじい困難と苦しみを味わうことになるだろっ」

先ほどと同じ言葉だが、次は悲しそうに言った。

「俺の占いは当たる…」

しかし、次は期待を持った様子でこう言う。

「だが、運命は変えられる。それが出来るかどうかは…お前次第だ」

これから降りかかる戦いの間の小さな安らぎのときである…。

彼らは、この安らぎを果てるまで続けられるようになるため、戦い続けるのだ…。

仮面ライダーとして…

そして人間として…。

日常 「無力ではない今」(後書き)

あとがき

如何でしたか？

うん…。やっぱりデートするシーンが書けないです…。(汗)。

私が、そういった経験が無いからでしょうかね(笑)

申し訳代わりに登場した、特別ゲストの占い師。誰だか分かりますか？

そう、彼ですよ！一応、名前も同じです。

ただ…、TV本編やTVSPで登場した彼ではなく、この世界の間です。

故に城戸真司との面識もありません。

今回は、久瀬と佐祐理をメインにします。

お楽しみに！

それでは…。

キャスト

北川潤 〓 仮面ライダーライア

美坂香里

美坂栞

水瀬名雪

沢渡真琴

相沢祐一 〓 仮面ライダーナイト

斉藤ミツル 〓 仮面ライダーインペラー

若い占い師

月宮あゆ

龍崎竜也 〓 仮面ライダー龍騎

日常「欲に忠実に…」 (前書き)

今回は、勉強会というものを題材にしてみました…が、あまりそのシーンが無い(汗)

因みに、今回は以前の「無力でない今」の次の日です。

もちろん、原作でゾルダだった彼と、その秘書も登場しますよ！

結構、短いのですが、お許しください…。

それではどうぞ…。

日常「欲に忠実に…」

家で、学校での課題…いわゆる冬休みの宿題というものに取り組む久瀬。

最近の戦いの激化で放置していたのだ。

一人だけのつもりだったのだが…。

「…ん？何か違うようない…」

「あはは、それ違いますよ。ここは、このページを参照してくださいね」

何故か、佐祐理が居る。

どうして、こうなったのかと言うと…。

その日の帰り道。

「そういえば、課題を放置したままだ…！」

何気なく思い出したこと。このままでは、提出物の評価が下がってしまう。いままで、何とか必死に勉強してきたのに、3年のこの時期に失敗することは痛手だ。

「おう、生徒会長！」「あ、久瀬先輩だ」「久瀬さんだね」

そう言っただけ現れたのは、潤と名雪とサトル。

「やあ。どうしたんだ、珍しいチームだな」

「まあ確かにおれと虎水は、全員が集まったとき以外に顔を合わせること少ないけど…」

そういえば、と久瀬は思い出した。

何故か潤とミツルが鉢合わせになり、よく喧嘩していることはあるが、サトルと潤が一緒にいるところはあまり見ない。

だが、どうでもいいことなので、置いておくことにした。

「で、久瀬さんは何をあせっていたの？」

「ああ、課題だよ。ここ最近、放置したままでね」

「へえ〜…学生って大変だね」

サトルは中卒なので、その様な経験が無い。ちなみに竜也、ミツルも同様である。

「…聞いた」

と、背後から物静かな少女の声。

久瀬が振り向くと、舞がいた。

「生徒会長さん、佐祐理と勉強すると良い」

舞が何かを察したような発言をし、それに久瀬は少し戸惑う。

「い、いや、倉田さんは忙しいんじゃないでしょうか？」

「勉強すると良い」

…ゴリ押しである。

それで、なんだかんだ言いつつも…。

「はえ〜、佐祐理は頭悪いですよ？ね、舞」

「佐祐理は頭が良い…」

舞は佐祐理を呼んで、久瀬のことを話した。なぜか、今回の舞はかなりアクティブだ。

結局、久瀬は佐祐理と勉強することにした。

佐祐理は、3学年でも首席に到達しても、なんら不思議ではないほどの成績優秀者だ。

一方の久瀬も成績はかなり優秀。佐祐理と並ぶほどといっても良い。そんな彼と一緒に勉強する人といえば、自然に佐祐理になるであろう。

「あはは〜、なら行きましょう！」

そう言つて、佐祐理は楽しそうに歩いていった。

舞は、その様子をじっと見つめて、久瀬に囁く。

「あとは…頑張つて」

それだけ言つと、すぐにその場から立ち去つた。

「佐祐理を悲しませたら…許さない」

なぜか、脅し文句のような一言を残した。

「本当にいいのだろうか、僕なんかと…」

「いいんじゃない？」

その言葉に振り向くと、弁護士バツジつきのスーツを着た30代ほどの男性と、少し無愛想にしている男性の2人組みが居た。

話しかけたのは、スーツの男性らしい。

「入ってのはさ、自分の欲に忠実にならないと面白くないのよ。さつきからお宅、全然自分の欲を出してない。そんな人生つまらないと思わない？」

久瀬は佐祐理のことが最近気になりつつある。だが、それは誰にも言っていない。舞は、なんとなく気付いているようだが、この初対面の男がなぜ、こんなにするすらと自分のことを言っているのだろう…。

「は、はあ…。というより、貴方は一体誰ですか？」

「ま、黒を白にするスーパードクター弁護士ってところ？」

やはり弁護士のようだ。さらにかんりの自信家である事が、今の発言から伺える。

「俺にもさ、狙ってる人はいるよ。「令子さん」って言うんだけど、なかなか振り向いてくれなくてね。でも、しょっちゅう食事に誘ってるよ。お宅もさ、がんばんなよ。自分の欲を出さないと、時として人を悲しませることもあるのよ。ここ、重要ね」

それだけ言うと、手を振って後ろを向いて去っていった。

「ゴロちゃん、今日の夕食は、あっさりした懐石料理がいいな」

「分かりました。じゃあ、それに合う美味しいもの買って帰りましょう」

「令子さん誘ってみようかな？薔薇の花を百万本。やっぱり男は薔薇でしょ。それに俺の角度「右斜め45度」が加われば、令子さんも落ちるかもね」

そんな会話を残して…。

「久瀬さん！早く〜！」

「あ、はい！」

遠くから呼ぶ佐祐理の声に返事をして、元の場所を向くと…。

弁護士の男とゴロちゃんと呼ばれた男は居なくなっていた。

一方、相変わらず探し物をしている竜也とあゆ。

「商店街以外の場所でなくしたのかも…」

「うぐう…思い出せないよお〜」

彼女の記憶も頼りにならないので、手がかりはかなり少ない。

「竜也、あゆ」

舞が現れ、話しかけてきた。

「あ、舞さんこんにちは。どうしたの？」

あゆの質問に先ほどのことを話す形で返答した。

「久瀬さんと佐祐理さんが…しらなかつたなあ…」

「わたしは、佐祐理に幸せになって欲しい。わたしに思いつくその

手助けは、生徒会長さんと一緒に居るようにさせることだと思う」

「…そうだね、おれも舞さんに賛成。何が最善の方法かなんて分からないけど、なにか行動を起こすことが大切だと思うな」

そして、元の時間まで戻る。

順調に課題を終わらせているが、突然、佐祐理が久瀬に聞く。

「久瀬さん。最近、佐祐理の顔を、ちゃんと見てくれなくなってますんか？」

「ぼ、僕がですか…？」

「はい。門矢さんたちが来るちょっと前から、面と向かって話するとき、すぐにそっぽを向いてますよね？」

心当たりはあった。

「何か悪いことしましたか…？佐祐理はバカですから、わからなくて…」

佐祐理は悲しそうにうつむいている。その様子から、泣いているようにも見えた。

「あ、いや、違うんです…。それは…」

久瀬にとつて自分の行動は、彼女のことが気になりつつある故の反応であつて、拒絶ではない。

あの弁護士の言葉を思い出した。

自分の欲を出さないと、時として人を悲しませることもあるのよ。ここ、重要ね。

まさに、今がその状況だつた。

彼女を悲しませたくはない。

だから久瀬は、自分の思いを自分なりに言葉にした。

「その…。正直に言います。あなたのことが気になってました。だから、どうやって接したらいいのか分からなくなつて…」

「…そう…だつたんですか…」

佐祐理はその言葉を聞いて、安心と心が温かくなる感覚を覚えた。

今、目の前にいる人が自分にとつて、どういう存在なのかも…。

「じゃあ、佐祐理は…」

「待つてください」

佐祐理の言葉を途中でとめる久瀬。

「この続きは、ちゃんとしたときに言いたいです。だから、待つてくれませんか。きっと、僕はあなたに相応しい人間になります」

「はい…待つてます！」

これから降りかかる戦いの間の小さな安らぎのときである…。

彼らは、この安らぎを果てるまで続けられるようになるため、戦い続けるのだ…。

仮面ライダーとして…

そして人間として…。

日常「欲に忠実に…」(後書き)

あとがき

如何でしたか？

うん…。ほのぼのしてるのか、これって…。(汗)自分の恋愛描写のセンスが、しょぼいことを痛感します…。
気を取り直して、次回はサトルと名雪です！
どうやって話を作ろうかと模索中です…。
それでは…。

キャスト

久瀬シュウイチ〓仮面ライダーゾルダ

倉田佐祐理

川澄舞〓仮面ライダーファム

北川潤〓仮面ライダーライア

水瀬名雪

虎水サトル〓仮面ライダータイガ

スーパー弁護士を名乗る男

ゴロちゃんと呼ばれた男

月宮あゆ

龍崎竜也 〓 仮面ライダー 龍騎

日常「英雄」(前書き)

今回は、過去の回想シーンが主となっております。

何故サトルがタイガになったのか。そのシーンをもっと鮮明にしてみました！

それではどうぞ…。

日常「英雄」

「本当に助かってます、サトル君。いつも買い物に付き合ってもらって」

「ううん、平気ですよ秋子さん。僕だって、何かお手伝いがしたいですから」

「ありがとね、サトちゃん」
夕方の買い物帰り。

買い物袋を抱えたサトルと、名雪、秋子の3人が並んで歩いている。その姿はまさに家族といえるだろう。

「あ、竜也君とあゆちゃん！」

名雪が嬉しそうに駆けてゆく。その先には、探し物をしている2人の少年と少女がいた。

「こんにちは、名雪さん！」

「見つからないよお……」

あゆは名雪に気付かず、未だに探し物の最中。

「まだ見つかりそうもない？」

「うん……。あゆの大事にした物みたいだし、おれが贈った物だから、絶対に見つけたいんだ。あゆも、あんなに必死になって探してるんだけど……」

竜也と名雪が会話している姿を見ていた秋子は、口に手を当てて、サトルにこう告げた。

「私、少し思い出した用事がありますから、先に帰りますね。名雪をお願いしますか？」

「はい。なゆちゃんは僕が責任を持ってつれて帰ります！」

「まあ、頼もしい。じゃあ、よろしくお願いします」

少し微笑んだ後、秋子はその場を去った。
すると……。

「昔の事、思い出してみない？」

ふと聞こえる声。その方向を振り向くと、大学生くらいだろうか。小説を右手に持った青年がベンチに腰掛けていた。

その小説の名は、カフカの「変身」。

「何故、君が英雄になりたかったのか…知りたいな」

「え…？」

7年前のことである。

「もぉ…いやだ…」

一人で泣きじゃくる少年。

彼は、両親から愛情を、全くそそがれなかった。家に居れば常に両親から受ける虐待。外に出ても、誰一人彼を気にするものはいない。少年に居場所はなかった。

「僕は…どこに行けばいいの…？」

誰も答えてはくれなかった。

…今までは。

「雪、積もってるよ？」

そう言って話しかけてきたのは、青い髪を三つ編みに結んだ、同じ年頃の少女だった。

彼女の言葉で、自分の頭を手で触れると、少量の雪だったであろう冷たい水滴が手についた。

「…もしかして、泣いてたの？」

どんなに泣き虫であっても、女の子に涙を見せたくないのが男の子の意地。一生懸命、涙を拭いて返事をした。

「泣いてないよっ!」

「でも、目が赤いよ?」

涙は拭いても、その証拠までは隠し通せないのが悲しい。少女は簡単に見抜いた。

観念した少年は、何故泣いているのかを話した。

「…僕は、どこに行けば良いか分からない」

「お家に行けば良いと思うけど…迷子なの?」

「やだっ!家はやだ!君まで、そんな事言うの!?!」

怒鳴り散らして、暴れる少年。

家には、彼の恐怖の対象が居る。戻るなどまっぴらごめんだらう。

「ご、ごめんね!…もしかして、もつと遊びたいの?」

困ったように謝る少女。落ち着いた少年を見て、彼女なりの考えを言ってみた。

「…そうすれば、どこに行けばいいか分かるかな…?」

少し不安そうだが、同時に期待を込めて聞く少年。

「うん、きつと!一緒にあそぼ!わたし水瀬名雪!あなたは?」

「虎水サトル…」

「じゃあ、サトちゃんだね!」

これがサトルと名雪の出会いだった。

「ねえ、どう?雪ウサギ作ってみたの!」

「…かわいいね」

名雪が嬉しそうに雪ウサギを作って話しかけても、どこか虚ろな表情でかえすサトル。

「…えいっ!」

「うわっ!?!」

雪を丸めて、サトルに投げつけた。

「…なんだよっ！」
ムキになったサトルは、名雪に雪玉を投げ返した。
「きゃっ！あは、雪合戦だよっ」

その日の夕方頃まで2人は遊びつくした。

「はあ…はあ…僕の勝ちだね…」

「うっ…負けちゃった…」

雪玉をあてた数は圧倒的にサトルが勝っていた。

「…そろそろ夜になるね。サトちゃん、もうお家に帰る時間だよ？」

「家…？やだ、かえりたくない！かえったら、また叩かれる…」

サトルは、相変わらず家のことになると異常なほど拒絶するような様子を見せる。

「うっん…。じゃあ、わたしのうちにおいでよ！」

「え、でも…」

「ほら、いっ！」

その日、秋子はサトルを受け入れた。

「どうして、君のお母さんは優しいの？」

「だって…お母さんって優しいものだよ？」

名雪の言葉はサトルを無意識に苦しめる言葉となった。

「そうなんだ。羨ましいな…。僕のお母さんはいつも怒って、僕を殴るんだよ。お父さんも同じ。どうして、僕だけ…？」

「あ…」

幼い彼女にも、どういう事なのかは、分かってきた。

「じゃあ、わたしのお母さんが、サトちゃんのお母さんになればいいんだよ！」

「君…もしかして、バカなの？君のお母さんが、僕のお母さんになれるわけないよ！」

「了承」

ふと、声がしたほうを振り向くと、頬に手を当て微笑む秋子が立つ

ていた。

「あなたの両親には、わたしから言っておきます。もしサトル君が
良いのなら、わたし達の家族になつてくれませんか？」

「僕は…いいのかな？」

「やったく！サトちゃん、今日からわたしの家族っ！」

こうして、サトルは水瀬家の家族の一員となった。

それから何日もたった。

サトルは随分と水瀬家に打ち解けられ、以前の暗い性格は明るく変
わっていった。

「なゆちゃん、ごはんが出来たって！おきなよ！」

「うにゅ〜…」

何気ない日々。サトルにはとても新鮮に感じられ、そして何よりも
幸せだった。

だが…。

「ねえ、サトちゃん。もうすぐね、わたしのいとこの祐一が来るっ
て！」

「祐一…君？」

「うん、昔からよく遊んでいたけど、これからはずっとわたしの家
に住むんだって！」

「そう…なんだ…」

サトルは彼女の様子を見て、何か孤独な感情を覚えた。

「名雪、サトル君、ご飯ですよ」

「あ、サトちゃん、ごはんだったって！」

「…今日はいいいよ。おなか減ってない」

その日の夜。

「なゆちゃん…祐一君のことが好きなんだ…」

彼女は祐一が来ることを何よりも嬉しそうに話していた。

嫉妬…なのだろうか。だが、それに抵抗するほど、その頃のサトル

は強い感情を持っていなかった。

「そつか。僕のことを好きになつてくれる人なんて、いないんだ。あはは…ははははは…」

静かな部屋で、サトルの乾いた笑い声と鼻をすするような音が響いていた。

サトルは、名雪達の前から去った。

いずれ、独りぼっちになるくらいなら、自分から消えたほうがいと考えていたからだ。

だが、自分の家に戻るつもりはない。一人で生きることを決意した。

それから、6年ほど経ったある日。

サトルは、様々なところを放浪しながら、何とか生きてきた。死のうとしたことも何度があつたが、結局、恐怖が勝り、実行できなかった。

この日、彼は想像も出来ない出来事に巻き込まれる。

「ミイイイイイイ！」

「ひっ、怪物!？」

目の前には、黄色いセミを模した異形「ソノラブーマ」が居た。

一瞬、逃げようとしたサトルだが…。

「ここで死ねばいいのか…。僕は自分で死ねないもんね」

あきらめたように、目を閉じたサトル。

ソノラブーマは好機と見たか、腕先の巨大な鉤爪でサトルに襲い掛かる。

… 筈だった。

「又ンツ！」

ドゴオオオオオオオオオ!

「ギヤアアアアアアアア！」

突如、目の前を黄金の光が包み込み、ソノラブーマは跡形もなく消えた。

悟るが恐る恐る目を開くと、そこには光り輝く影がいた。

「似ている…。英雄になりたくはないか？皆に愛される英雄に」

「…英雄？」

英雄。

その言葉に、サトルは異常なほど心地よさを感じた。

「みんなに好きになってもらいたい…。英雄に…なりたい！」

その瞬間、目の前に青い長方形の物体が投げつけられた。

カードデッキだ。

「使え。英雄に近づくための武器だ」

そのカードデッキをゆつくりと掴む。

英雄になるために…。

「変身っ！」

話は、今の時間へと戻る。

「それで…。今もなりたい？」

そう問いかける青年。

竜也と話している名雪を見ながら、笑顔で返した。

「…ううん。僕は英雄になりたいんじゃないじゃなくて、なゆちゃんに好きになってもらいたかった。だから…」

「へえ…。なら、大丈夫だね。英雄ってさ、なるうとした瞬間にアウトラしいからね」

「うんっ！…って、あれ？」

強く頷きながら、振り返ると…。

あの青年はいなくなっていた。

「よう虎水。名雪と一緒にか？」

祐一と真琴、さらにミツルも居た。

真琴はおなかを押さえ、元気がない様に呟く。

「あうう…」

「真琴が腹をすかせているんだ。そろそろ竜也とあゆを呼び戻す。

竜也しか、家で料理できる奴はいないからな」

「おれも腹へってさ。名雪と虎水が居ないと晩飯が食えないんだ」

今は、みんなが自分のことを大切にしてくれている。

彼は、なるつもりはなかっただろうが、いつの間にか「英雄」になっていた。

「じゃあ、かえろ。僕たちの家に！」

これから降りかかる戦いの間の小さな安らぎのときである…。

彼らは、この安らぎを果てるまで続けられるようになるため、戦い続けるのだ…。

仮面ライダーとして…

そして人間として…。

日常「英雄」（後書き）

あとがき

如何でしたか？

いやあ、デートではなく過去話（汗）。まあ、戦闘描写がほぼないという点でお許しください（笑）。

金色の影が「似ている」と言っていたのは、性格のことです。

オーデインは、インペラーを除いて原作と似た性格のものを選んでいるのです。

次回で日常は最後なのですが、またしても過去話です。

お付き合いください（汗）。

ではまた…。

キャスト

虎水サトル 〓 仮面ライダータイガ

水瀬名雪

水瀬秋子

沢渡真琴

齊藤ミツル 〓 仮面ライダーインペラー

相沢祐一 〓 仮面ライダーナイト

金色の影（仮面ライダーオーデイン）

小説を読む青年

月宮あゆ

龍崎竜也 || 仮面ライダー龍騎

日常「春が来たら…」 (前書き)

日常編、最終話になりますミツルと真琴をメインにしたストーリー。
この話は、Kannonの原作にあったシーンを基に書きました！ (様々な改造あり)

ちなみに、「英雄」の直後の話です。

それではどうぞ…。

日常「春が来たら…」

「てえああ！」「だああああああああああ！」
ドガアアアアアアアアア!

凄まじい爆発。その理由は、龍騎とインペラーにあった。
たった今、モンスターを倒したところなのだ。

ちよつと、サトルたちと別れた後に遭遇したのだが、仮面ライダー
に休み無しとは、よく言ったものだ。

「よっし！」

2人は変身を解き、ミツルと竜也の姿に戻った。

「平気だった？」「あうう…」

物陰で見守っていた真琴とあゆが近づいてきた。

「大丈夫、これくらいなんとも無いよ」「まさか、おれ達があんな
モンスターに苦戦するとも？」

「よかったあ…」「あうっ…！」

あゆは2人の反応を見て安堵し、真琴はミツルに飛びついた。

「つたく、いつまでも子供のつもりか？」「あう…？」

飛びついた真琴をつつとうしそうに押しつけるミツルだが、それは
本意ではない。彼女の自立をほんの少しでも導くためなのだ。

ただ、真琴はそのことが分からないため、少しだけ不安げな眼差し
でミツルを見る。

少しいたずらげな笑みを浮かべて、ボソツと呟くあゆ。

「ミツルさん、真琴ちゃんにメロメロのくせに…」

「そつだ。悪いか？」

「あ、あれ？」

あゆは、ミツルの隠している本音を暴くつもりだったのだが、意外
にも慌てふためくことはせず、さらりと本音を述べるミツル。

「おれは自分の感情を押し殺すことは苦手だし、真琴もおれの事を
好きでいてくれる。おれが隠す必要があるとも思っただか？」

「うぐう…参りました…」

ぺこりと頭を下げ、謝るあゆ。それを見ていたミツルは仕返しを開始した。

「おまえは隠してるんだな。おれよりも感情を押し殺すことは上手いだろうしな」

「え…な、なんのことかな？」

ミツルの振りに、冷や汗を一筋たらすあゆ。

「いやあ、羨ましいなあ〜！初々しいなあ〜！」

近づいてくる声。

振り返ると、警備員らしき青年が屈託の無い笑顔で歩み寄ってきた。中くらいの大きさのダンボールを抱えている。

「若い少年と少女の恋！あこがれるなあ〜！」

「なんだ貴様？」「ミツル、失礼だって！」
少し怪しむミツル。

「ああ、ゴメンゴメン。名乗りたいんだけどね、名詞忘れちゃってさ。まあ、ここは偶然、出会ったイケメン警備員ってことで！」
随分とフレンドリーな警備員である。

「ところでさ、その君」

そう言つて、警備員はミツルを指差す。

「なんだ？」

「お宅さ、いろいろ吹っ切れたんだ。昔は自分の願いにだけ執着して、周りを見てなかったみたいだけど、今は目の前のこと以外にも見えてるんだね。教えたいことが色々あったんだけど、君に関しては大丈夫そうだな。自分の本当の願いが叶ったとき、残った叶えるための力を正しく使っている。俺も「百合絵さん」って婚約者がいてね。彼女と出会えたとき、残された力を上手く使えなかった…」
「わけが分からん…」

彼はどうやらミツルに伝えたいことがあつたらしいが、今はその必

要はなくなつたらしい。

「そうだ。教える代わりに、この子、貰つてくれない？周りの住民がうるさくてさ。保健所に引き渡すのも可哀想だね」
ダンボールをあけると、そこには小さな猫がいた。

「ウニヤ〜」

「あ、たい焼きつまみ食いしてた、猫ちゃん！」

「うそ!？」

覚えているだろうか。第2話であゆが竜也に伝えたことを…。

「たい焼き屋さんでたい焼きを買ったんだ…。でも、お金がないことに気がついて…」

「そのとき、猫ちゃんがやって来て、置いてたたい焼きをつまみ食いしようとしたの…。そしたら、おじさんがものすごい怒って、それで怖くなって…」

その猫がこれなのだ。

「泥棒する猫を、おれ達が飼えつて言うのか？」

呆れ口調で言うミツル。

「あつう…!」

突然、真琴が首を振り、猫を抱きかかえる。少しだけ上目遣いになり、涙を目に溜めてミツルを見つめる。

「くっ…。竜也、家にこいつを飼えるスペースの余裕あるか？エ

サ代諸々は、おれが払うから」

「おれは良いよ。それにエサ代とかだって、おれもちよつとは出ですよ。家族がまた増えるなんて、嬉しいからね。あゆは？」

「ボクも賛成！」

満場一致。この猫は竜也の家に住むことになりそうだ。

「助かったよ。じゃ、後よろしく!あ、最後に言っとくよ。大切なのは願いを叶えるまでじゃなくて、叶えたあと」

「まったたく…。猫を押しつけやがって…ん？」

猫をチラリと見た後、警備員のいた方向を見ると。

彼は消えていた。

「どこ行つたんだろ?」「逃げ足だけは速いらしいな…」

「この前の占い師の人と言い、最近は急に消える人が多いね」

警備員のことにはさほど不思議に思つてはおらず、早速、猫の名前決めが始まる。

「こいつ、名前どうする?」

「あつう…」

真琴が地面の砂で文字を書き始めた。

「ピロ」

それを書くとき、ミツルの腕に抱きつく。

「ピロ…それでいくか。名前決めに時間かけることも面倒だしな。異論はあるか?」

「ピロ、良い名前貰つたね!」「よろしく、ピロ!」

「みんなあ!」

遠くから2人を呼ぶ声がする。

名雪とサトル、そして久瀬だった。

「さつき、爆発がきこえたんだが…」

「遅いぞ久瀬。もうおれと竜也で片付けた」「ありがとございませう。もう大丈夫ですよ」

「そ、そうか…。とりあえずは安心したよ」

ミツルと竜也の言葉で安堵する久瀬。

「わあ、猫だあ!」「な、なゆちゃん!猫アレルギーでしょ!?!」

名雪は、真琴が抱いているピロを見た途端、大好きなものを見つけ

たかのように近寄ろうとする。

しかし彼女は、猫に触れると涙や鼻水が出てしまふ、いわゆる猫アレルギーなのだ。そのことを知っているサトルは、何とか引き離そうとする。

「ピロって言うんだ。あ、今からピロの世話道具を買いにいかないと…。ミツル、真琴ちゃん、先に帰って、ピロと遊んであげて。久瀬さん、あゆ、手伝ってくれる？」

「ああ、構わないよ」「うん、いいよ！」
そう言って、3人は街へと戻っていった。

「そういえば、クリスマスが近いね。なにか、計画してみようかなあ……」
ふと独り言を呟きながら、竜也は歩いていった。

名雪とサトルと別れ、帰り時の途中。

「そういえば真琴。おまえ最近、マンガをよく読むな」
ミツルがそういったのは、ときより書店に立ち寄ったとき、真琴はよく少女マンガを立ち読みしている姿を見るからだ。

「あつう……」
ミツルの初任給で買ったマンガがあるのだが、それを真琴は肌身離さず持っている。

ページをめくり、一つの単語を指差す。

結婚

少女マンガではよくある話なのだが、彼女はこれをずっと見ていたらしい。先ほどの警備員が言った婚約者等の話も、真琴はかなり聞いていたような気がする。

「結婚か……」

真琴は以前、ミツルと一度別れる前のときに、高熱を出していた。そのとき、おぼろげに彼女が自分と結婚をしたいと呟いていたこと

をふと思い出した。

「あうう…くるしい…」

「しつかりしろ。いたずらを成功させるんだろ？」

「ミツルう…そばにいてくれる？」

「…」

そのときのミツルは復讐に燃えており、自分と一緒に居れば、彼女を巻き込んでしまう。そのことは良く思っていなかった。

だから、その答えは出せなかった。

「そうだ…結婚…。結婚したら、ずっと…一緒なんだよね？」

彼女はミツルと、どうしても一緒にいたかった。

だから、彼女が知っている大好きな人とずっと一緒にいることの出る唯一の方法を、口にした。

「…春が来たらな」

真琴を悲しませないための嘘だった。

その言葉を嬉しそうな表情で受け止めた。

「そうだね…春が来て…結婚して…ずっと春だったらいいのに…」

だが、今は違う。

「…大丈夫だ。結婚なんてしなくても、おれがおまえを離さない。

でも…おれにおまえを絶対に守ることの出来る自身が着いたら…」

一呼吸置いて、真琴と正面を向いて言う。

「真琴、結婚してくれ」

今までの中で、これ以上無いほど幸せそうな表情で頷く真琴。

「あ…いああ…と…」

かすれるような声だったが「ありがとう」と言った事は分かる。

「こつちこそありがとうな」

「ふふ、盗み聞きは無粋と思いましたが、聞かせていただきました」

「天野…!?!」

物陰から、美汐が現れた。

「あうう……」

真琴も恥ずかしいらしく、顔を真っ赤にしてミツルの後ろに隠れる。「わたし、2人の婚約の証人にさせていただきますね」

「……くえない奴だな。さて帰るか。竜也とあゆも帰ってきたら、一緒に飯を喰うぞ。天野もどうだ？」

美汐がニコニコしているのが気に食わないのか、ぶっきらぼうに言い捨て、歩き去ってしまったミツル。

真琴は美汐の腕を引っ張り、彼を追いかけた。

「大丈夫ですよ。あの人はとても優しい人ですから……」

これから降りかかる戦いの間の小さな安らぎのときである……。

彼らは、この安らぎを果てるまで続けられるようになるため、戦い続けるのだ……。

仮面ライダーとして……

そして人間として……。

日常「春が来たら…」(後書き)

あとがき

如何だったでしょうか。

他のキャラの中では一番長かったのですが、結構上手く出来たような気がします(デートではありませんが)。

逆に警備員の存在意義がほぼ無しに近い…(汗)。

あとピロですが、NoMen編で登場していなかったなので、近々追加シーンを書きます。何卒、ご了承を…。

一旦これで、日常編は終了です。

次回からは、竜也が物語開始前に何があったかをメインにした「序曲」(EPISODE Kannon First)を展開予定です！

ではまた…。

キャスト

斉藤ミツル 〓 仮面ライダーインペラー

沢渡真琴

天野美汐

虎水サトル 〓 仮面ライダータイガ

水瀬名雪

久瀬シュウイチ 〓 仮面ライダーゾルダ

警備員

月宮あゆ

龍崎竜也 || 仮面ライダー龍騎

「再臨」

「はあっ…！はあっ…！」
少年が死に物狂いで走っている。
彼は、ある青年に託された。

「ここで、正しい心を持った仮面ライダーを潰えさせては駄目だ。
お前なら正しい心を持って戦えると信じている。仮面ライダー龍騎
になって戦え！そして、お前が本当に信頼できる仲間^に他のデッキ
を託して、共に人々を救え！」

「僕が継がないと…そうしなきゃ！」
少年…竜也はひたすら走る。
すると…。

キイーン…キイーン…

「な…！これが、モンスターの気配!?」
突如、耳鳴りのような音が聞こえる。

モンスターの接近音だが、これを聞くのは初めてだ。

「グウウウウ！」

現れたシアゴーストの群れ。恐らく、追っ手だろう。
辺りを囲うように立ち塞がり、逃げ場はないように思える。

…と思っただが、よく観察すると、何とか抜けられそうな隙間がある。
ここから逃げ出そう。今は、逃げなくては。
だが…。

「…そうだ。逃げてたら、真司さんと、また会えない…！人を…守
れない！」

意を決する。

この選択が例え修羅の道になるとしても。

竜也は決めた。

「…っ！」

青年…城戸真司から託されたモノであるカードデッキを、モンスターに見せるように突き出す。

使い方は熟知している。

彼のイメージどおり、腰に白銀のベルト、Vバックルが装着される。右手を平たく斜め上に突き出し、大きく叫ぶ。

「変身っ！」

そして、カードデッキをVバックルに装填する。

すると、竜也の周りに幾つもの虚像が現れ、眩い光と共に彼を包み込む。

そこには、竜也の姿は無かった。…いや、姿を変えたのだ。

仮面ライダー龍騎へと…。

「しゃあっ！」

かつて城戸真司が意気込んでいたように、彼も意気込み、モンスターに向かって走り出す。

「だああっ！」

ドガアッ！

「ゲウウウ!？」

自分の力とは思えなかった。

まるで、小石が遠くへ飛ぶように、シアゴーストは吹き飛ばされた。

「これが…仮面ライダー龍騎…」

両手を見つめて、改めてその力の凄まじさを実感する。

だが、敵は怯まず次々と襲い掛かってくる。

「…なら！」

デッキからアドベントカードを引く。そこには、青龍刀が描かれて

いる。

左手にあるドラグバイザーに挿入し、セットするベントインを行なった。

< SWORD VENT >

右手にカードに描かれていたドラグセイバーが現れた。

「はああっ！」

ザンツ！

「グゲエアウ！」

襲い掛かってきたシアゴーストに向かって、それを思い切り振り下ろす。

少し抵抗があつたが、結局あっさりと強固なシアゴーストの皮膚は切り裂かれた。

地面に倒れ、もがき苦しむシアゴースト。

その光景を見て、龍騎に一つの言葉がよぎる。

モンスターも生きているんじゃないのか…？

そう、モンスターには凶暴性しかないものの、確かに生命体ではある。

人を守ると言うことも、究極は命を守ると言うことだ。

ならば…たとえば、人の命を奪う存在だとしても、彼らの命を奪うことは、許される行為なのか？

さつきまで決めていたはずの決意は、早くも揺らぎ始めた。

ズガア！

「ぐあぁあ！？」

自問自答している間に、背後から攻撃を受ける龍騎。

スーツ越したからと言って、その攻撃のダメージ全てを防ぐことが出来るわけではない。

もちろん、怪我もするし、痛みも伴う。戦うとは、こういうことな

のだ。

苦痛を体験して、再確認するとは皮肉だった。

ただ、そこで立ち止まるわけにはいかない。

…とは言え、今の彼にこれ以上の攻撃は出来なかった。

「ガアアアアアアアアアアア！」

「ドラグレッダー!？」

ドガアアアアアアアア!

「グウウウ!？」 「グウエエ!」

突如、契約モンスターである、無双龍ドラグレッダーが龍騎のもとに現れ、シアゴーストを薙ぎ払った。

「ドラグレッダー、ここから逃げるから手を貸して!」

龍騎はドラグレッダーの背中に飛び乗り、そのまま、大空へと飛んでいく。

ドラグレッダーが守っていたはずの城戸真司のことが脳裏をよぎったが、今の彼にはどうすることも出来なかった。

大空を舞うドラグレッダーの背中は、何故か心地よかった。

少しずつ、睡魔が襲う。

そのまま、紅い龍の背中に身を預け、変身を解いた竜也は意識を闇の中に落とした。

夢…。

夢を見ている…。

毎日見ている夢。

終わりのない夢。

赤い雪、赤く染まった世界。

夕焼け空を覆うように、小さな子供が泣いていた。

せめて、流れる涙をぬぐいたかった。

だけど、手は動かなくて。

頬を伝う涙は、雪に吸い込まれて。

見ていることしかできなくて、悔しくて、悲しくて…。

大丈夫だから…。

だから泣かないで。

約束だから…。

それは誰の言葉だったろう…夢は別の色に染まっていく。

夢の中にいる竜也。

これは…何の夢なのだろう…？

何気なく、外に出ていた自分。鼻を嚙り、寒さに身震いする。
その姿は、7年前の姿だった。

「…？」
「…？」

背中に何かぶつかつた感触があつた。振り向くと、同い年くらいの少女が、泣きじゃくつていた。

「うぐう〜…」

「な、なんだ？」

いきなり目の前に現れた、泣きじゃくる少女に対して、竜也は困り果てる。この場合、どうすればいいのだろうか…。

必死に考え、思いついたアイデアは、名前を聞くことだった。

我ながら、捻りのないアイデアだと落胆しつつ聞いた。

少女を怯えさせないように、穏やかな表情を見せることも忘れない。

「とりあえず、名前を教えてください？僕は龍崎竜也」

「ぐすつ…あゆ…」

なんとか、名前は名乗ってくれた。だが、苗字が分からない。改めて聞く。

「えつと…苗字は？」

「あ、あゆう…」

…あゆ？

名前があゆで、苗字もあゆ。

ということは…。

「…じゃあ、あゆあゆなの？」

「ち、ちがうよお…」

あゆと名乗る少女は、身を揺すつて否定する。その表情に悲しさが、さらに浮き出た。

「じゃあ、苗字は…？」

「…ぐすつ」

何故か答えてくれない。聞かない方がいいのだろうか…？

「う〜ん…」

首を捻つて、これからどうするか考えていると、周りの人からヒソヒソと話し声が聞こえた。

「なに、いじめられてるの？」「ああ〜あ、可愛いそうに…」

不味い、勘違いされている。

「よ、よし、場所変えて、話し聞かせて、あゆ！」
「うぐう……」

あゆの手を引いて、走り出した。

そして、夜は明けていく……。

「……？」

目を覚ますと、そこは何処かの事務室のようだ。

「大丈夫？」 「あ、起きた！」

「驚いたよ。まさか、あんなところに倒れてるんだからな」

話しかけてきたのは、一人の男性と、竜也のことを興味深そうに覗き込む、メガネをかけた奇抜な髪型の女性と、いかにも今時と思わせるようなファッションに身を包んだ女性。

遠くには、仕事に生きる姿を体現したような女性が、パソコンに向かっていている様子も伺えた。

「ああ、安心しろ。ここは怪しくて、おっかないとこじゃねえよ」
二カツと笑う男性。悪い人達ではないようだ。少なくとも、竜也にはそう思えた。

「自己紹介がまだだったな。俺は、この情報配信社「OREジャーナル」編集長、大久保大介」

「あたしは浅野めぐみ！「めぐみ」って呼んで！」

「あっちに居るのは、桃井令子。ここに運んでくるとき、手伝ってくれたんだよ」

「私は島田奈々子。君は？」

3人が、パソコンに向かっている「桃井令子」を含めて自己紹介をしてくれたので、自分も自己紹介した。

実はこの令子、後に久瀬に話しかけた「スーパー弁護士を名乗る男」がアプローチしている女性なのだ。

だが、それを知る術は、今の竜也にはない。

「あ、僕は龍崎竜也です。助けていただいて、ありがとうございます」

「竜也って言うのか」

名乗ってくれたことに喜んでいるのか、竜也の頭をくしゃくしゃと撫でる。

「お前、なにか背負ってるな？」

「えっ？」

大久保の突然の質問に、竜也はうろたえる。しかも、的中しているから尚更だ。

「昔な。ここに、おまえとよおしく似たヤツが来たときがあつてな。名前も顔も知らないヤツなんだけど、初対面なのに俺や令子達のことを知ってるように接した。そいつも、何か重いモン背負ってる気がしてよ」

大久保編集長の脳裏によぎる、その青年。

…それが竜也の「誰よりも尊敬する人物」だと、誰が予想できたであろうか…。

「結局たった一日で、ソイツは居なくなっちゃった。ソイツと同じ顔してるんだよ、お前。何があつたか知らないけど、気負い過ぎんなよ？」

もう一度、ニカツと笑う大久保。

「…僕、わかんないんです。助けたい人がいて…でも助けようとする、別の人を犠牲にしなくちゃいけないんです。…どっちも犠牲にしたくないとき…どうしたら…っ！」

「アツハハハハハハハハ！」

言い続ける言葉を遮るように、大久保が大口を上げて笑い出した。

突然のことに、竜也はビクツと驚く。

「上等だよ、コンニャロ！良いんだよ、答えなんか分かんなくて！考えてんだろ、その出来の悪そうな頭で。それだけで十分じゃないのか？…俺はそう思うぜ？」

「大久保さん…」

次に大久保編集長は真面目な表情になって、竜也の肩に手を置く。

「ただしだ。何が分からないかは良いが、そのなかにお前の選択肢も、ちゃんと入れとけよ？」

「僕を選択肢…？」

「…お前が信じるモノだよ。お前も心の中に「芯」がないと、話し合いにもならないし、誰もお前の話なんか聞いてくれない。…な？」

「僕の…信じるモノ…」

竜也の中に何かが生まれようとしていた。

今まで興味がなさそうにしていた令子だが、後姿の竜也を見て、優しく微笑んだ。

それは、めぐみと奈々子も同様だ。

キイーン…キイーン…

「…大久保さん、それに令子さん、めぐみさん、奈々子さん、ありがとうございました！」

そっくり残して、外へ飛び出した竜也。

自分の「芯」を強く持ち直し、あらためて戦いの場へと赴くために…。

「再臨」(後書き)

如何だったでしょうか？

今回登場した、OREジャーナルのメンバーは「EPISODE FINAL」やTVシリーズ、TVSPの彼らではありません。

「日常」に登場した「彼ら」のような人達です。

大久保編集長と竜也の会話、TVシリーズ49話の城戸真司との会話と全く同じです。

狙いましたね(笑)

次回はまたまた、原作の登場人物のそっくりさんが出てきます！

お楽しみに！

それでは…。

キャスト

龍崎竜也 〓 仮面ライダー 龍騎

あゆ

桃井令子

島田奈々子

浅野めぐみ

大久保大介

城戸真司 〓 仮面ライダー 龍騎 (初代)

「バケモノ」(前書き)

みなさん、ご存知ですか？

「仮面ライダーディケイド」が「ゴージャンジャー」とタッグを組んで復活しますよ！

また土の旅の続きを見れるとは…。来年のGWが楽しみです！

さて、今回は竜也の苦悩の話。結構キツイかもしれないです(汗)。

NoMenの2人も久々に登場します！

それではどうぞ…。

「バケモノ」

あれから6カ月後。

竜也は、NoMenに召集され、城戸真司のスクーターを使って、指定された場所に呼び出された。

本部はあるらしいが、実際の場所は知らない。

指定された場所は、人が集まりそうにない、静かな空き地のような場所だった。

そこには、2人の男性：香川ヒロユキと仲村ソウイチの姿があった。城戸真司と離れて以来、会うのは初めてだった。

「：おや、城戸真司さんの姿が見えませんか？」

もちろん、そのことを香川は知らない。気になった言葉に、竜也は苦虫を噛み潰すような表情で答えた。

「：何処にいるか分かりません。おれにこのデッキを託して…」
手元にあるのは龍騎のデッキと装着者のいない4枚のデッキ。

後の仮面ライダーナイト、仮面ライダーファム、仮面ライダーライア、仮面ライダーゾルダの変身者に受け継がれるものだ。

仲村は、それを見て合点がいった様子で言う。

「では、今は貴方が仮面ライダー龍騎ですか。手続きは私共の方で済ませておきましょう。これからも変わりなく、報酬を定期的に渡します」

「ありがとうございます」

「：そのデッキ、私達に預けるつもりはありませんか？」

香川が少し興味を示す。

何を隠そう、彼は科学者。未知の技術が込められた塊に興味を示すことは、至極、当たり前のことなのだ。

「それはできません」。真司さんから「心から信頼できる人に渡して、共に戦え」って言うてましたから…」

「我々が信用できないと？」

「違います。「共に戦う」ってことです。…仮面ライダーになるってことは、自分が思っていたことより辛いことでしたから…」
そう言っつてスクーターにまたがり、走り去った。

「…やはり信用できないのですね。まあ、私も「仮面ライダー」など、微塵も信用していないのですが」

夢…。

夢を見ている…。

毎日見ている夢。

終わりのない夢。

赤い雪、赤く染まった世界。

夕焼け空を覆うように、小さな子供が泣いていた。

せめて、流れる涙をぬぐいたかった。

だけど、手は動かなくて。

頬を伝う涙は、雪に吸い込まれて。

見ていることしかできなくて、悔しくて、悲しくて…。

大丈夫だから…。

だから泣かないで。

約束だから…。

それは誰の言葉だったろう…夢は別の色に染まっていく。

夢の中。

「えっと…なんで泣いてたの？」

あゆがようやく落ち着きを取り戻したので、理由を聞いてみた。

「おかあさんが…居なくなったの。もう、二度と会えないの…」

…幼い竜也にもどろろという意味か、一瞬判断に迷ったが、今はちゃんと理解した。

だから、どう声をかければいいのか分からない。

くう…

泣いていて赤かった顔がさらに赤くなり、うつむくあゆ。

「もしかして…おなか減ったの？」

無言でこくりと頷く。

「…ちよつと待ってて！」

それから数分後。

「はい！」

竜也は手に紙袋を持ってきて、その中からあるものを渡した。

「…たいやき？」

「うん、近くで売っててさ。食べなよ！」

おずおずと、あゆはたいやきを頼張る。

「おいしい？」

「…甘いけど、ちょっとしょっぱい…」

不思議そうな顔をして言う。竜也はあゆの頬を見て意味を理解する。

「泣いてるからだよ。泣かなかつたら、きっと甘くておいしいはずだよ！」

「そうなのかな…？」

「そうだよ！だから、笑って？…僕も笑うから！」

そして、夜は明けてゆく…。

さらに一週間で過ぎた。

時期は夏。

暑さで渴いた喉を潤すために、喫茶店に入った。

その名は「花鶏」。

「すみません、アイスコーヒーください」

店内で注文するが、店主らしき女性はきっぱりと返す。

「コーヒーは無い。紅茶だけ」

「あ…あの、じゃあそのアイスティー…ですか？それください…」
ちよつと、怖気づきながらも改めて注文する。

「はい！」

ウエイトレスだろうか。同じ年くらいの少女が、元気に返事をしてアイスティーの準備を始めた。

「いい娘でしょ」

「え？あ、はい…」

突如、先ほどのウエイトレスについて、店主の女性から話しかけられたので、戸惑いつつも返事をする。

「よく似てるのよ。あの写真の娘に」

顎でさす先には、コルクボードに数枚の写真が貼り付けられ、どの写真にも2人の少年と少女が写っていた。

「優衣って言うてね、アタシの姪っ子。もう一人は、その兄の土郎。

優衣はこの世に居ないし、土郎も行方不明だけど」

「あの…なんかすいません」

竜也が申し訳なさそうに謝ると、店主は豪快に笑う。

「いいのよ！アタシがペラペラ喋ったことだからね！…そうそう、さっきの娘！優衣によく似てるだろう？」

「…そうですね。いわれてみれば」

実際は、写真よりも大きいが、雰囲気などは結構酷似している。生き写しとまでは行かないが。

「偶然にも「ユイ」って言うてね。あの娘も身寄りが無くて、アタシが引き取ったの。苗字も無かったから、アタシの家の苗字を使ってるわ。あ、アタシは「神崎沙奈子」って言うのよ」

ユイの紹介ついでに自分の名前も名乗った沙奈子。

「おまたせしました、アイスティーです！」「ありがとうございます」

ちよつと、ユイがアイスティーを持ってきた。

「あ、ちよつと良かった。ユイ、このお兄さんとお話したら？同い年のお友達が欲しいって言うてたでしょ？」

「え、でも…」

「そうそう、アタシこれから「アマゾン同好会」に行かなくちゃならないの。悪いけど2人で店番頼めない？」

「ぼ、僕、客ですよ？…信用できないでしょう？」

「大丈夫、アタシの勘に間違いは無いわ！じゃあ頼むわね！」

かなり強引に物事を進める沙奈子。肝っ玉の雰囲気が身についている女性だと、竜也は感じた。

そう感じていると、すぐさま沙奈子は店から去っていった。

「えっと…ユイさん、ですよね？」

「はい！よろしくお願ひします！あと、ごめんなさい、沙奈子おばさんが余計な事言って…」

元気が取り柄と言った雰囲気だ。しかし、謝るときはすこし、しおれてしまう娘と言う印象を受けた。

「そんなことありませんよ。僕は龍崎竜也です、よろしくお願ひします」

ユイに対して嫌悪感は無く、自然な会話は出来た。

ただ、これ以上関わってはいけないようにも感じた。

なぜなら、自分は仮面ライダー龍騎だから。

「竜也さんですね！…えっと、この近くに住んでるんですか？」

「あ、いや。僕はずっと遠くに住んでいて、今は色んな所を転々としながら生活してます。だから、友達もあまり多くはなくて…」

それを聞いたユイは聞いてはいけないことを聞いたのかと思い、すこし申し訳なさそうに言った。

「あ、えっと…ごめんなさい」

「ユイさんは悪くないですよ。僕は…」

キイーン…キイーン…

「っ!?!」「竜也さん?」

突如、モンスターの接近音が聞こえ、竜也の表情は自然と険しくなる。

「キイイ!」

「きゃああっ!?!」

花鶏の中に、猿型モンスター「デッドリマー」が侵入する。

「やだっ!来ないで!来ないでよ!」

ユイは取り乱し、壁際に逃げる。

「こっちです!」

竜也はユイの手をとって、花鶏を飛び出す。

かなり走った後、2人は地面に座り込んで荒い息遣いをしつつ会話する。

「はあ…はあ…ごめんなさい、急に驚いて…」

「いや…良いですよ。あんなの見たら、ビックリしますよね…」

竜也の言葉に、首を振るユイ。

「わたしに身寄りが無いつて話、沙奈子おばさんから聞きましたよね?…わたしのお父さんとお母さん、あの怪物に殺されたんです」

「そんな…」

モンスターが呼ぶ悲劇は、こんなところまで来ていた。その事実
に竜也は絶望した。

「そのときの事が、頭から離れなくて…」

再び、顔を伏せるユイ。

竜也は、彼女の気持ちを何とか拭いたかった。

「…僕が行ってきます。あなた」

「た、竜也さん!?!」

「あれか…!」

走りついた先には、デッドリマーが暴れていた。

竜也に気付いたデッドリマーは、手に持っていた銃型の武器を構え

る。

「キイイイ…！」

「僕は戦う！倒すためじゃない。おまえ達のために傷ついた人達の苦しみを取り除く！それが僕の戦う意味だ！」

決意を胸に、デツキを構える。

「変身っ！」

現れたのは、一人の戦士。城戸真司の願いを受け継いだ、決意の紅い騎士。

「しゃあっ！」

「竜也さん…！」

その姿をユイが見ていた事を龍騎は知らない。

「くっ…！」

決意したとは言え、戦う事に躊躇する気持ちが無くなったわけではない。

「はあああああああああああ！」

それでも心の迷いを必死に振り払い、目の前のモンスターに、思い切り拳を突き立てる。

ドガアア！

「ギヤアアア！」

「ひっ！？」

吹き飛ばされた先には、ユイがいた。

デッドリマーは、ユイに目を向け、新たに狙いを定める。

「グウウウウウ！」

デッドリマーが掴みかかり、ユイは錯乱する。

異形に殺されるかもしれない恐怖で正常な意識が働かなかったのだらう。

「ゆ、ユイさんっ！？」

「きゃあつ！離してっ、助けてえええええ！」

ユイを救うべく、デッドリマーを突き飛ばす。

「はあつ！」

「グギア！？」

デッドリマーと距離を置き、ユイに近寄る龍騎。

「大丈夫ですか！？」

手を差し伸べるが…。

「いやっ！こ、来ないでバケモノ！」

「ち、違います！僕は、あなたを守ろうと…」

「いや…いやあああああああああ！」

なんとか弁解しようとしたものの、話は全く聞いてもらえず、彼女は走り去ってしまった。

「どうして…？僕は、守りたいだけなのに…。こんなことなら…いっそ…」

悲しかった。

人のために戦っていたつもりなのに、その人から拒絶される。

「キイイイ！」

立ち上がったデッドリマーは、ユイに銃口を向ける。

「っ！？ユイさん、避けて！」

ダァン！

間に合わなかった。

「…ああ…かはっ…」

鮮血を噴出しながら、ゆっくりと地面に倒れ伏すユイ。

「ユイさんっ！ユイさんっ！」

龍騎は駆け寄り、必死に抱き起こすが…。

「僕は…バケモノ…もう…人間じゃないんだ…」

「バケモノ」(後書き)

如何でしたか？

実は、この物語で一番残酷に殺してしまいましたユイ。神崎優衣のリマジだったのに…。

けっこう、竜也には精神的に来る話になりました。

ちなみに、途中で竜也の意識がシャットダウンする場面があります
が、ここで初めて、本編でも出現した凶暴な意識が出てきたと考え
ていただければ…。

次回で、序章は終了です。

キャスト

龍崎竜也〓仮面ライダー龍騎

あゆ

神崎ユイ

神崎沙奈子

香川ヒロユキ

仲村ソウイチ

城戸真司〓仮面ライダー龍騎(初代)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5990w/>

仮面ライダー龍騎 ~ EPISODE Kanon Trillogy ~

2011年12月10日01時50分発行